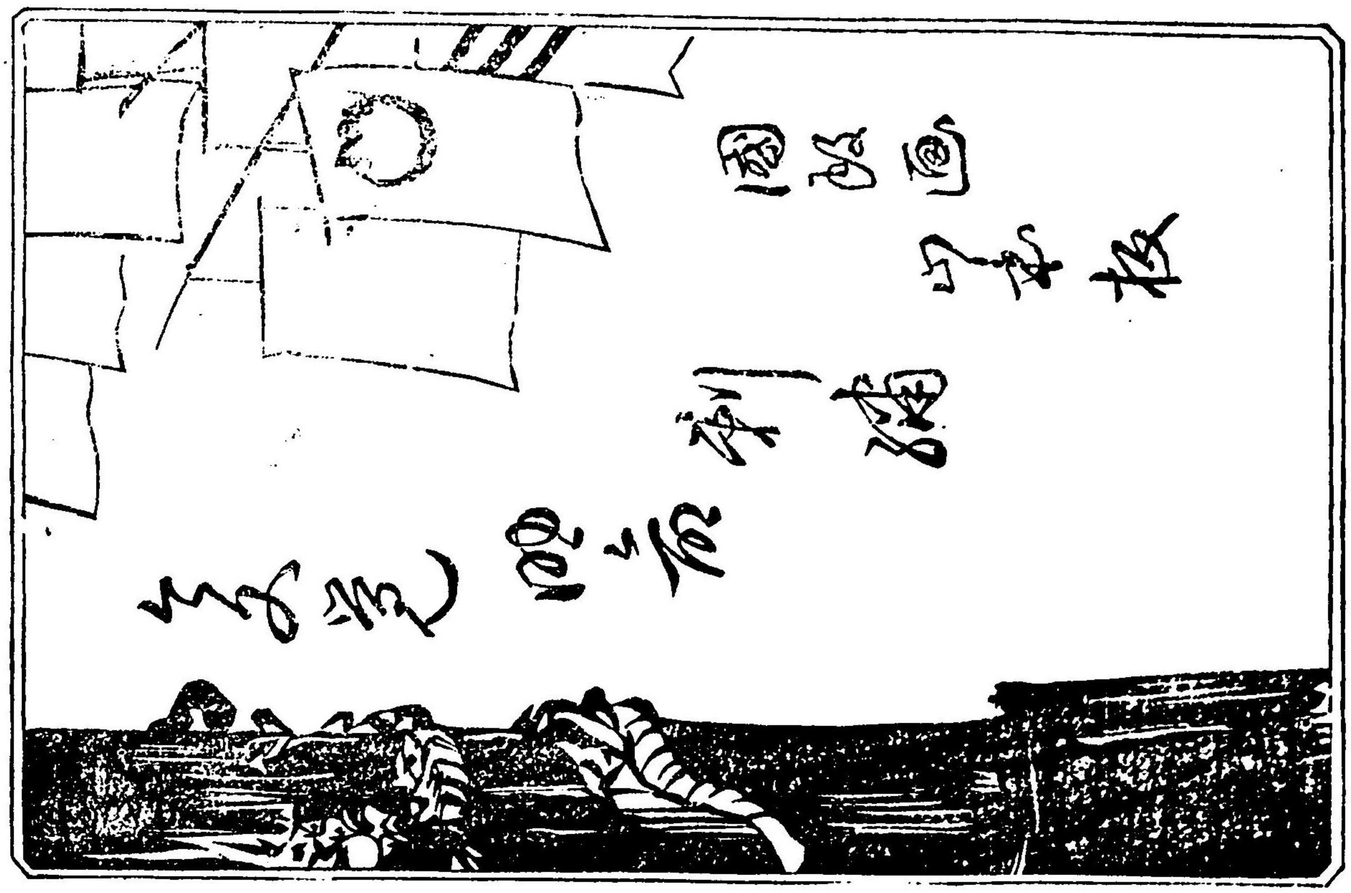
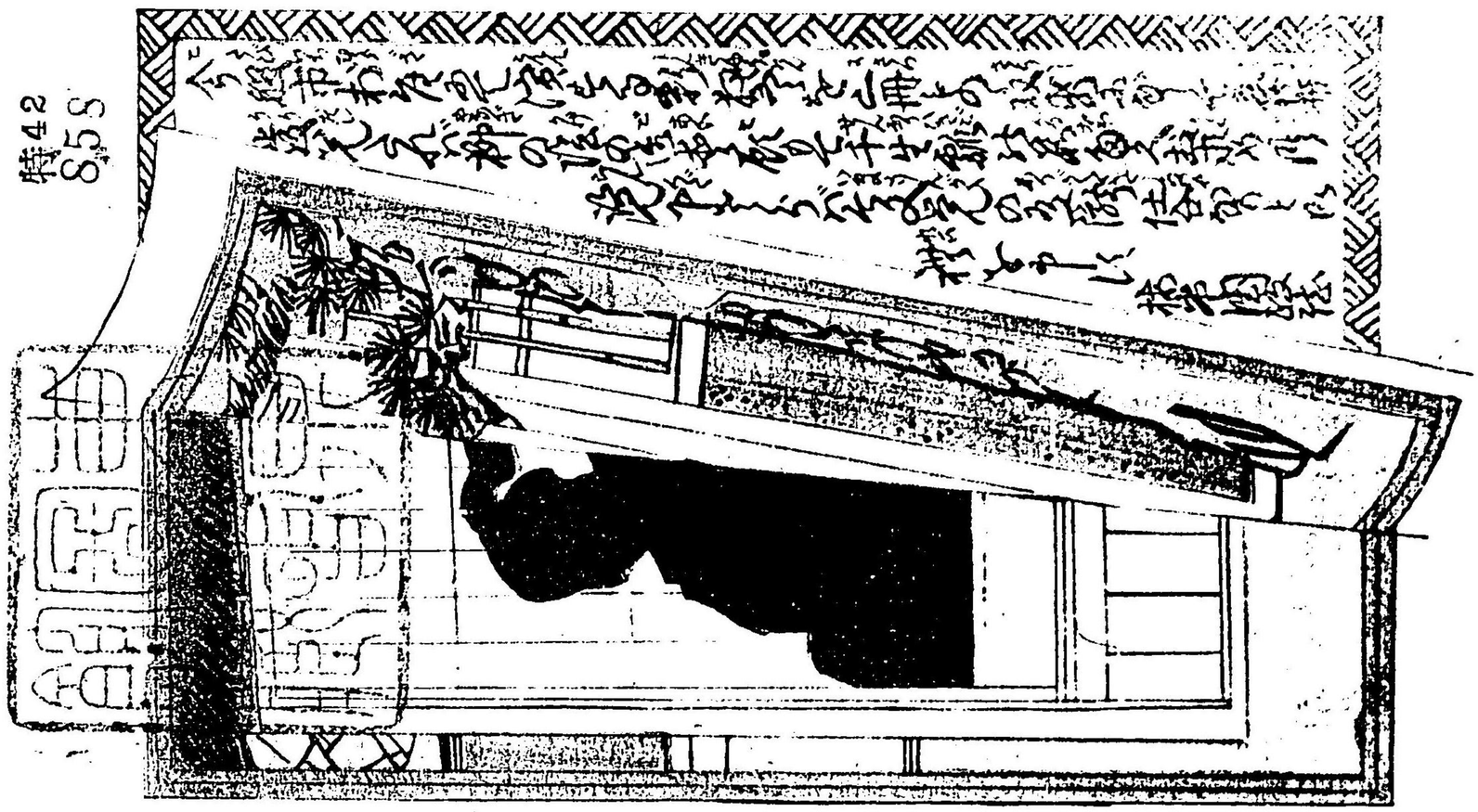
85
閻魔
あく
ひつくり
はん




特42
85S

備後
光秀
みさを

重次郎
初代久

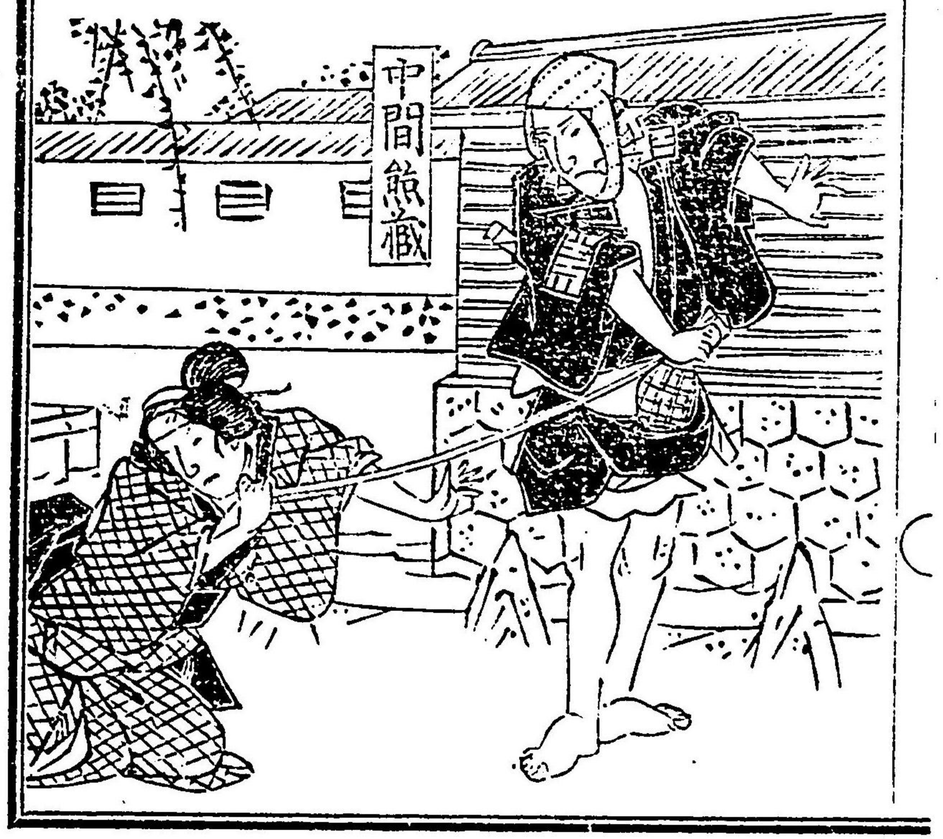
第壹回 神田旅籠町寄の場

德川の盛りし御代の外神田旅籠町の當席で忠臣藏のお茶番が今夜の出物と聞傳ひ客足繁き其所へ丁雅子僧お馳來り涉成道の刀屋から參りましあお且那ゲ涉見得成さまあら阿部川町の御内實さんお先刻から涉待成さるゝから早く涉歸り被下とやてくれと歸る折しも不動文治の子分ある制吒迦清太お妻れかつあお立寄てけふ私の古主駿河臺の坪内様の涉誕生日ゆへ涉手傳よ參り升と歸るとあんに坪内の中間熊藏お此間喧嘩の扱ひをあ替りよ壹両貸てくん弥へといふを此家の息子ある與吉お出て取扱ひ壹歩やつて追拂不勝〳〵よ熊藏ハ宿女おみとよあしたとて壹歩じやア行れとあめへまアいつぺい呑んで來よふと熊藏ハ壹人言いふ折からよ刀屋利兵衛と金貸と不思儀に此處で出會て刀屋ハ彼の不動國行れ一トあしを買求坪内様へ賣代あせバ直五拾両は利分の見込故金貸より百両借るを以前れ熊藏物陰よて立聞あしあいつハ捨てハかかれぬ仕事と跡追お來て付て行く

第二回 下谷三味線堀七ッ藏れ場

其頃れ流行物深川名物かりん糖〳〵と呼歩行を中間三人立出くおゝん糖やの辻占を開見て思ひ〳〵に別れゆくかりん糖やも其跡のら盛り場さして歩行ゆく折しも涙人良作の妻おゝうハ無余儀金子の入用よて時盛頃より持來し家重代の國行と刀屋利兵衛へ百両よ賣し金子と懷中なし息せくつて來る折しも跡より中間熊藏ゲほふ冠して付

來りモシ〳〵お神さん〳〵と呼留て今夜わ眞暗ぐりゆへ其提灯で汐一所よ連て往て下せいと言れておうわ氣味惡く上野の鐘も五ッ時いとゞさびしき七ッ藏如何あおして振拂わんとあせれど女のほそ腕太氣心の熊藏ゞ手早く提灯吹消ておそ



うの傍へさぐりよりいれおり懷中の財布とり行んとそると取すゞり二三度四五度爭ひしがついよおか柳を突倒し氣絶をなして倒れけり能藏惡どく乘かゝり强淫なさんとする折しも向北方より人れ足かと惜いをれだと熊藏わ何處とをなく逃行け

り折節此處へ中間を供よ連たる坪内の用人倉澤矢一郎通
りかゝりし折柄よ婦人壹人倒き居る故介抱なせば息吹返
し其子細と尋けをバお柳ハ漸々心付介抱受し御恩とば厚
く御禮を申せし跡身の簿命より重代の壹トこし迄も賣拂
ひ漸々求めし百兩迄取ゝをゐる一伍一什聞とる倉澤矢一
郎如何よを不愍よ思ひし故差當て壹両金と惠を遣し手間
取難ク用事あをばと心殘しゝ別を行お柳ハ跡と伏拜み此
儘此め〳〵歸ゝをぬと涙あゞらよ歩行ゆく又とや以前れ
熊藏が莨入を落せしとて拾ひ廻りー其處へ文治の子分
の幸治と清太ゞ通行あそよ突當三人の無言場よて逐よ消
太ゞ拾ひ取駕屋の若者二人でハよわ員じと熊藏ハ石を投
打走りゆく

第三回駿河臺御旗本坪内邸之場

透まあ兄邸町ある駿河臺坪内殿ハ奥よてハ今廿八日ハ殿
慶十郎様御誕生の日ありとて御恩送りよ御手傳をと制吃
迦清太ゞ妻のおつあ馴た古主の御邸ゆへ何かゝ何の御手
傳侍女衆も打寄て芝居噺しそれその中へ殿の妹小澤どのお
つあと見より走り出つあハ何ーて居やるやとお孃さまの
お言よお綱ハ悔り禮をあし芝居の噺しを致ー居り升とお
受申せバ孃さまハ腰元二人を奥へ遣まだなどけあき風情
よて去年お國へ行時よ神奈川宿の泊りにてほんの旅路の
憂晴し私を胸を打明て名殘りおーくも其儘故認置し此み
をどふぞアノお人へと言れてお綱ハ當惑あしそりやなの
時限の事御内分の事よして孃様よハ御家督と大久保の御

次男と沙祝言とあされ升せと御異見中折柄よ刀屋利兵衛の門口ヨリお頼みヤと聲を掛御膳様へ御取次とぞ願ふゆへ言殘して両人ハ御取次よぞ奥よ入る殿ハ奥ヨリ用人の矢一郎ゲ付添出刀屋よ面會あし國行の名刀を百五拾両にて買求利兵衛ハ金

子受取御禮とのべ立去ヨり殿慶十郎ハ悦びて日頃望し名刀を我誕生の今日よ不動國行の手よ入しも大山不動の利益あふんと笑と含く悦びけり

第四回

阿部川町良作浪宅之場

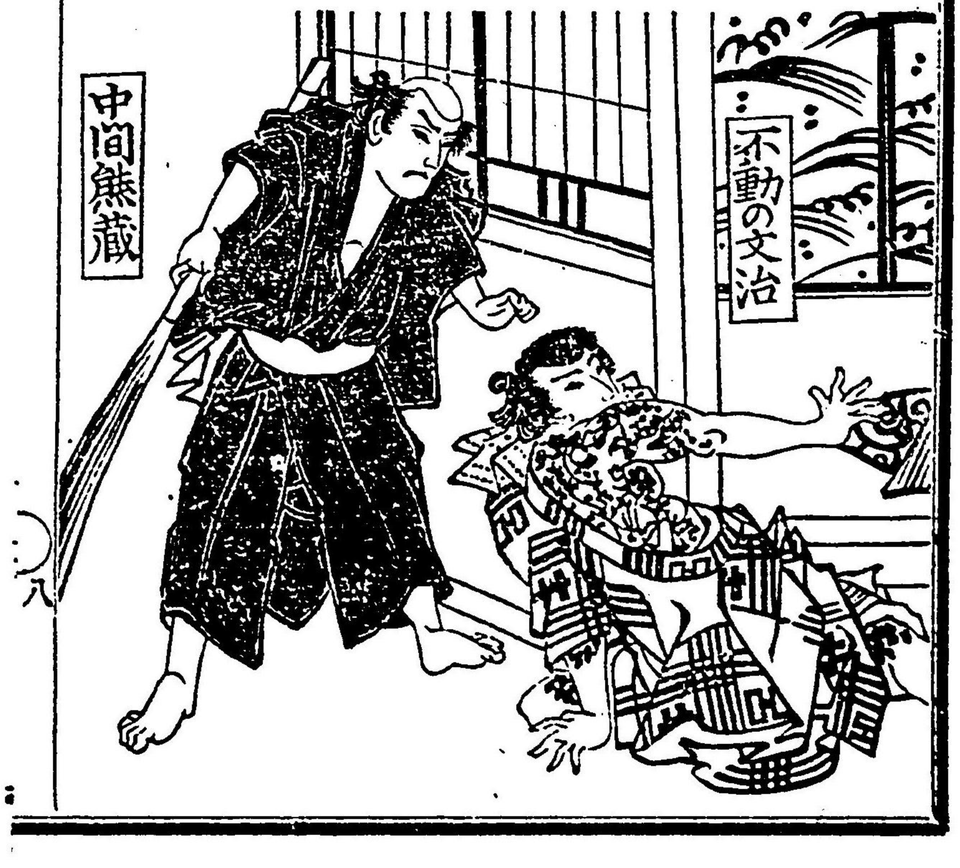
盛衰ハ世の常とハいゝあごのら我程の薄命

ハ又もや外に有まじと病の床より眞作が妻の歸りと待折柄合長屋此女房のお柳さんがお留主ゆへ嘸お困でござり升と尋て歸る其所へ弟の林之助入來り姉上はまだお歸りでざりませぬか刀屋でハ金子と渡し暮方お歸りなさまし聞て眞作心配おしどふか間違でもなければと言も切ぬ其内より坂倉の對談人入來りて林之助の引負金今日こそハ返金せよさもなけをハ訴て死罪の刑を請るかと言を眞作平伏おし後刻迄にハ相違おくと願ゐよりて對談人然れば一ト廻用達おく來ようかと出て行跡より兄弟顔見合當惑おしく居る處へ此家主此太郎右衛門がお柳を連て入來り三味線堀での始末を語りく詫けをハ兄弟二人ハ悔なし眞作涙を流し恐れるとお柳ハ居てもたまゝ兼ゐ詫ハ為此世で致し升せふと又一さんより駈出すを家主跡を追駈行跡より弟林之助私ゆへより姉上迄死去成さをくハと兄ハ刀と取く自殺の体夫と見るより眞作が其方迄を死を逐て病に臥す此兄より猶を難義を增せるのと止むる所へ家主この後鉢卷して飛で入お柳どのが大井戸へ飛込んとする所へ文治どのが通り合二人しく漸く助て來まーゐと聞て兄弟安堵おそ折から以前の對談人サア金子を渡おなせエトても嚴ハ催促より不動文治が聞兼て身に引受て今五日猶豫を聞濟對談人此度ハ間違なハ樣と藏前さして歸り行眞作お柳ハ兩手と合せ何分ゐ賴ミヤと云ハ文治が急度引受く神田とさしく歸りゆく

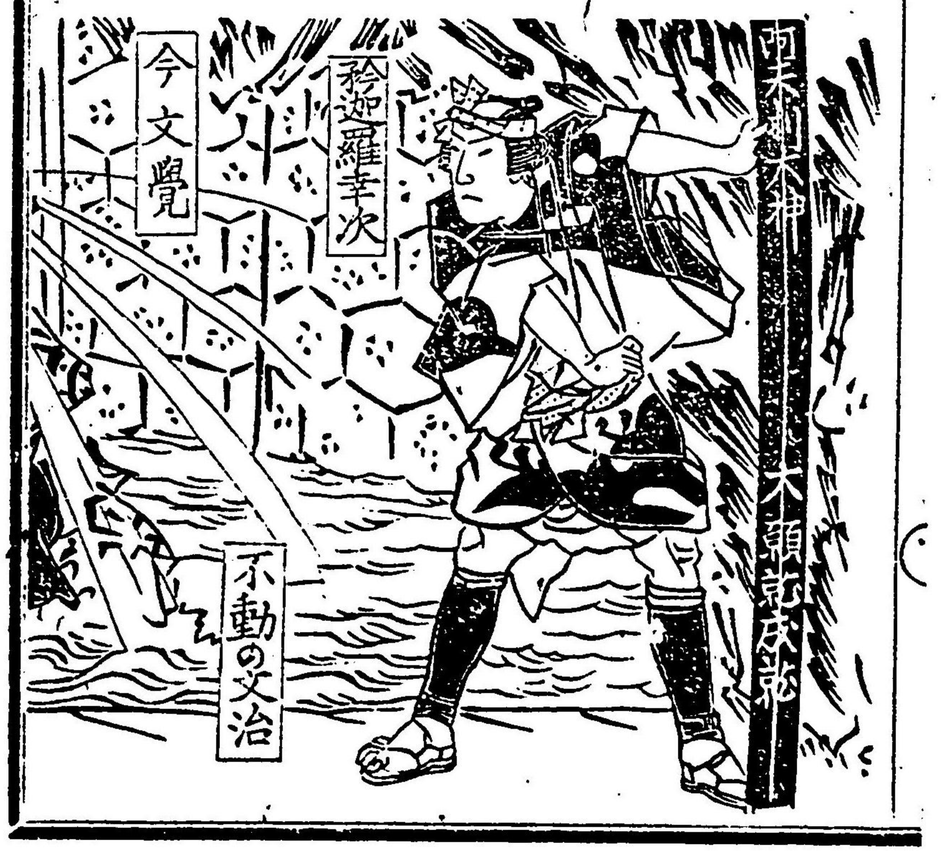
第五回須田町不動文治内之場

駕屋仲間ハ其中でも不動文治と立らをし妹のお籠ハ病の爲口の利をず癡も同樣お母ハ又内弱とやらで目ハ見へずと若イ者ゲ語りあ昭折柄文治の歸り來て出來そふで出來ぬ物ハ金と云ゲ今日で五日歩行たゲ何と云にを大金百兩と壹人言云後より

お籠と母ゲ出來りそあれ歸りを心配ゑく兎あくに目ゲ痛しと云を文治ゲ介抱して母ハ手と引奥に入るあとる處へ長作ゲ文治服ハ沙宅あと云よ文治の走り出兼ての金子を今日ハ夜に入とを急度御屈中升る長作大よ悦びて然らバ其吉左右を宅よ



て御待申升ると厚く
禮と述しうへ我家を
さしく歸り行文治ハ
跡で腕組おしどゐの
仕樣ハ有まゝかと思
案おしつゝ奥よ入る
何のどさくさ宅の前
制吒迦清太と仲間と
突當つゝとの喧嘩
ゆへ文治ハ奥より走
り出取扱つて濟せゝ
れバ仲間も腰を掛噺



抔そる其所へお柳も
爰へ用有く入來折し
も仲間の噺の聲よゝ
と氣が付ア、此人ハ
此間金を取ゝお人だ
とせ込云を文治ハ
目と付今莨若入より
落したる小判と云清
太ゞ捨し紙入よ仲間
熊藏キョット驚しが
文治ハ思案しゞさと
此場ハ追歸を猶も受

合た金よ思案の其所へおつあげ持來る媛様のみを財よて讀下し此みを種に去く濟ぬ事とハ知あがら古主のお爲坪内様へ金の無心よと止るもなのず走りゆく

第六回駿河臺坪内邸之場

侍女衆が打寄て掃除抔して居る處不動文治が駈來り奥に入らんとする處を仲間二人が押止め折しを用人彌一郎奥より出て文治よ向ひ媛様との一條を確と夫とハ分ら泳ど後室様へ相願ひ五十両を遣ハす故一ッ札と入立歸をと云を文治ハ承知せず百両借泳へ其内ハと云ー處へ仲間が木太刀を以て打懸り斷し爭ひ其所へ坪内慶十郎駈出てやア双方共控ヨト過去頃神奈川よて侍女網ゞ取持て妹小澤と密通せし不埒者武家の掟よ予ごの手打よ致し呉んと立上る

軍法八軍政六

上總木綿小紋單地

宮本二刀傳實錄

假名手本忠臣藏

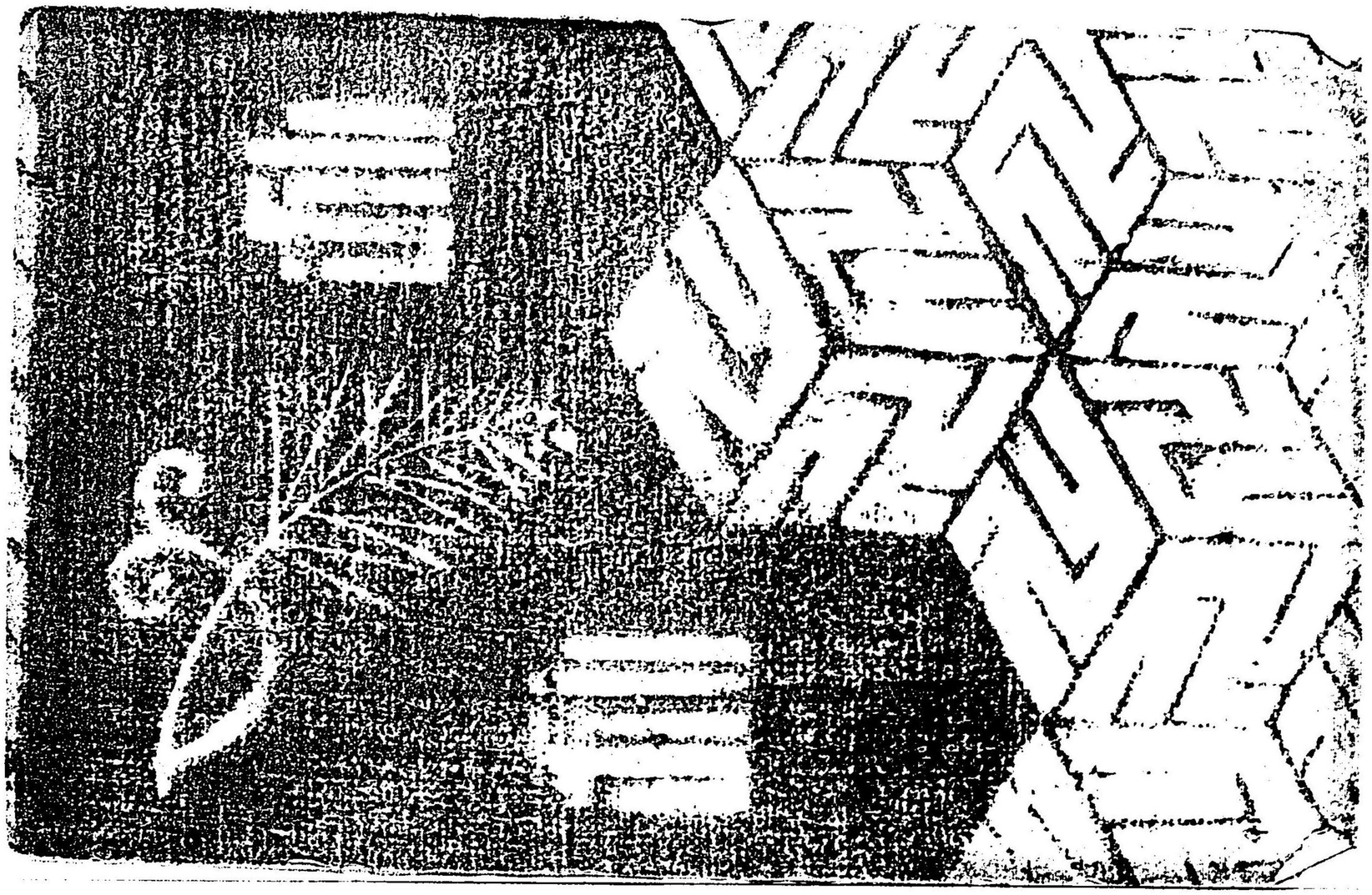
繪本頼朝一代記全部

川中島甲陽軍記全同

面乃雪

加々見山故郷錦繪全同

地本草紙問屋 江戸芳町 親父橋角 父山本屋平吉板



091931-000-3

特42-858

今文覚助命刺繍

梅堂　国政／画

M16

DBP-0044